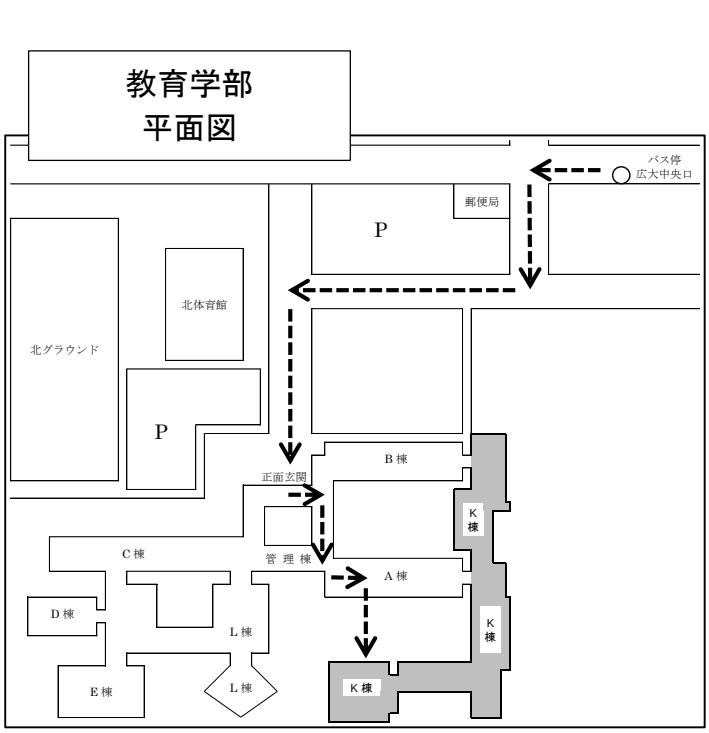
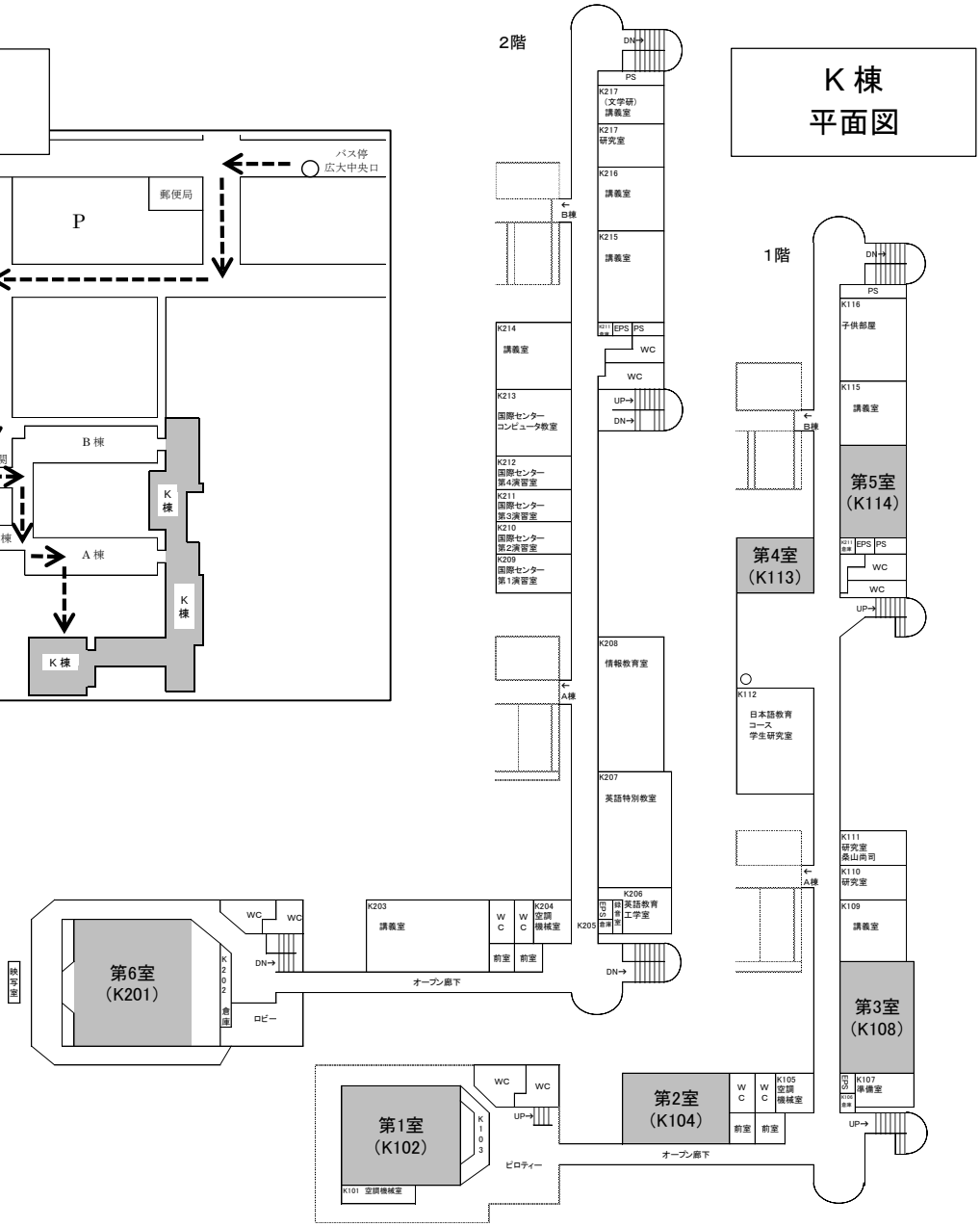
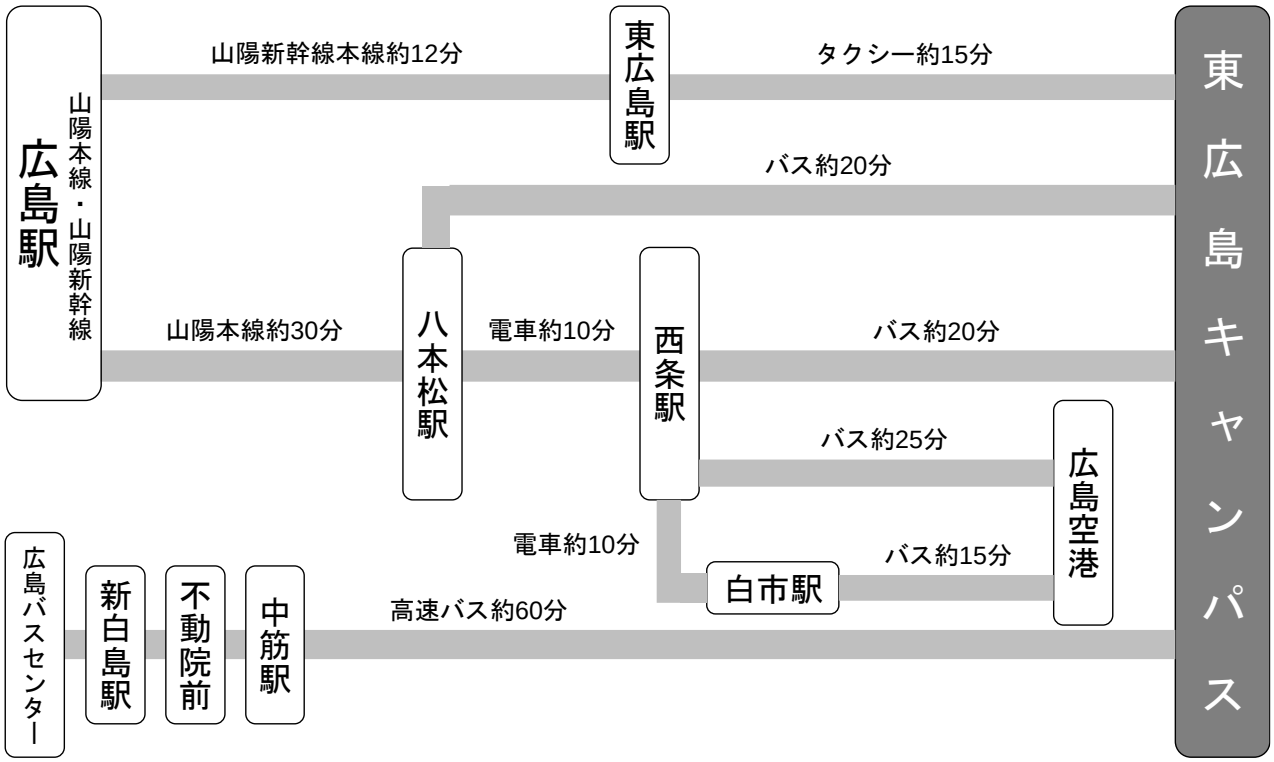
第 50 回中国地区英語教育学会・研究発表会要綱集

［日時］令和元年 6 月 29 日（土）
［場所］広島大学　教育学部（東広島市鏡山 1－1－1）
［会費］正会員　：無料
　　当日会員：一般 2,000 円／学生（含大学院生）1,000 円（資料代として）
［日程］11:00～12:30 理事会（教育学部第一会議室）
　　12:00～受付（教育学部玄関）
　　13:00～13:40 総会（教育学部 K 棟 K201）
　　13:45～14:45 中国地区英語教育学会設立 50 周年記念招待講演
　　伊東治己全国英語教育学会会長　「CLIL と日本の英語教育」
　　14:50～17:40 自由研究発表（教育学部講義棟 K 棟各室）
　　18:00～20:00 懇親会（西条 HAKUWA ホテル）　会費：5,000 円程度を予定
※当日参加も受け付けております。なお，正会員でない方は，当日会員として会費を受付でお支払いください。





広島大学　東広島キャンパスへの主要アクセス



研究発表をなさる方は以下の点にご留意ください。

・発表時間は 20 分，質疑応答は 10 分とします。
・計時係を各室に配置し，20 分で 1 鈴，30 分終了で 2 鈴鳴らします。
・司会者は依頼しておりませんので，質疑応答は発表者で行ってください。
・発表資料については，30 部程度ご用意いただき，発表の直前に配布してください。
・会場にはプロジェクタと RGB ケーブルのみ用意しております。その他，必要な機器類（パソコン，端子変換アダプタなど）は全てご持参ください。

	第 1 室（K102）	第 2 室（K104）	第 3 室（K108）	第 4 室（K113）	第 5 室（K114）	第 6 室（K201）
13:00～13:40	－	－	－	－	－	総会
13:45～14:45	－	－	－	－	－	伊東先生ご講演
14:50～15:20	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	－
15:25～15:55	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	－
16:00～16:30	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	－
16:35～17:05	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	研究発表	－
17:10～17:40	－	－	－	研究発表	研究発表	－

第１室（K102）

14：50 ～ 15：20
高等学校における絵描写タスクを用いたスピーキング指導
―英語の知識を活用する力の育成を目指して―

酒井　桂子（鳥取県立米子西高等学校）
大谷　みどり（島根大学）
猫田　英伸（島根大学）

本研究では，高等学校１年生（約 300 名）を対象とし，既有の英語知識を活用して即興で話す技能について指導を行った。生徒のスピーチ・サンプルを客観的評価，主観的評価の両面から分析したところ，指導によって上昇が認められた多くの側面のうち，総語数，異なり語数については，絵が変わっても維持されることが確認された。

15：25 ～ 15：55
プレゼンテーション活動×話すこと［やりとり］

久松　功周（広島大学附属中・高等学校）

英語による表現力育成の手段としてプレゼンテーションが挙げられる。この活動では，発表者である学習者が準備した内容を「吐き出す」ことに終始してしまい，聴衆に応じて表現するという「教科特有の見方・考え方」から乖離してしまう場面も見られる。本発表では，その欠点の補完を目指した相互作用的プレゼンテーションの実践発表を行う。

16：00 ～ 16：30
L1 および L2 によるノートテイキング指導―継続指導による効果の検証―

猫田　英伸（島根大学）

本研究では，L1，L2 を聞いてメモをとる練習が，それぞれ L2 を聞いてメモをとる能力の伸長につながるかを調べる実験を行った。調査協力者は大学 2 年生（16 名），3 年生（17 名）であった（音源には短いレクチャーを使用）。L1 での指導の効果が確認されたことに加え，ノートテイキングへの意識の変化も捉えることができた。

16：35 ～ 17：05
A Comparative Study of Senior High School English Textbooks in China and Japan: Focusing on Learners' Own Cultures

郭　景新（広島大学大学院生）

To cultivate learners for the global era, one approach proposed in the national guidelines by Japan and China is fostering learners' competence in outputting their own cultures. However, textbooks are being questioned by studies for not fulfilling their role in this aspect. The present study's primary aim is to find out how learners' own cultures are treated in two sets of widely used government authorized English textbooks.

第 2 室（K104）

14：50 ～ 15：20
TOPRA モデルの数理モデリング

鬼田　崇作（広島大学）

多くの第二言語習得理論は，我々が日常で使用する自然言語によって記述されているため，受け入れやすい反面，厳密さに欠ける。これらの理論を数学的に形式化できれば，より厳密な理論構築が可能となると考えられる。本研究は，第二言語の語彙習得モデルである type of processing-resource allocation（TOPRA）モデルに焦点を当て，その形式化を試みる。

15：25 ～ 15：55
CEFR-J の語彙と高等学校の検定教科書の語彙との比較（3）

八島　等（広島文教大学）

昨年，一昨年に引き続き，CEFR-J で示されている語彙を改訂版検定教科書で用いられている語彙と比較する調査を行った。CEFR-J の A1 から B2 までの語がどの程度改訂版検定教科書でも用いられているのかを見てみた。今年度で３年生までの教科書が出揃ったので，全体像が掴める。

16：00 ～ 16：30
書くことによるテキストジャンルの変換が英文内容及び語彙の想起度に及ぼす影響

浅井　智雄（福山平成大学）

英語を書くことは，アウトプット促進や思考力向上の面から大変重要である。本研究では，大学１年生を対象として，英語の対話文を案内文に変換する活動を行った。変換過程における指導手順の影響を，母語による筆記再生における英文内容及び語彙の面から見た想起度を尺度として検証した。発表では，変換前後の想起度を分量・正確性・全体構成の３つの視点から分析した結果を報告する。

16：35 ～ 17：05
言語分析力の弱い学習者に必要なテクストとは―事例基盤主語習得に焦点を当てて―

戸出　朋子（広島修道大学）

用法基盤モデルを援用した第 2 言語習得研究では，文法発達は事例基盤であり，入力も基本的な典型事例から拡張事例へと徐々に拡げていくのが最適とされる。本研究は，日本の下位層の英語学習者にとって習得困難である主語に焦点を当て，中学校検定済教科書のテクストで主語が基本事例から拡張事例へと無理なく提示されているかをコンコーダンスソフトで分析する。

第 3 室（K108）

14：50 ～ 15：20

英語学習を支える環境要因について―“Café”に焦点をあてて―

吉川　正美（ELS）

生徒・学生は，教室内外の多様な場で学びを実行しており，その環境には，英語習得を支える効果的な学びの環流の促進が望まれる。そのためには，国内の教育関係機関で創出されている学びの場のそれぞれの特性を詳らかにすることは重要であろう。本研究では，Café の定義と構成要素の解明を試みる。

15：25 ～ 15：55

Remotivation が起こるときの高校生学習者の動機づけタイプの変化

森原　彩（柳井高等学校）

学習者の言語学習動機づけは社会文化的な影響や学習者が置かれた環境など様々な要因でダイナミックに変化し続けるものであり(Dörnyei & Ushioda, 2011; 菊池, 2015)，教育的介入により動機づけを向上させることができる（Crookes & Schmidt, 1991)。一度学習動機づけが弱くなった生徒が，もう一度学習動機づけを高める「remotivation」はどのような理由で起こるのだろうか。高校 1 年次から 2 年次までの 2 年間の情意的変化を検証し，報告する。

16：00 ～ 16：30

高等専門学校生の英語学習に対する動機づけを規定する要因についての考察

倉増　泰弘（徳山工業高等専門学校）

本発表は，高等専門学校生（以下「高専」と呼ぶ）の英語学習に対する動機づけが何に規定されているのかを考察するものである。廣森（2002）で用いられたアンケート（5 件法）を現在の学校現場の実態に合うように再編集し, 高専 A 校の学生を対象に実施した結果を紹介する。本発表では，因子分析の結果だけでなく，自由記述の内容についても考察を行う。

16：35 ～ 17：05

EFL ライティングにおけるルーブリック介入時の学習態度と英文の変化

藤居　真路（広島県立尾道商業高等学校）

EFL ライティングにおいて，ルーブリック評価が英文を改善する上で効果があることが明らかにされており（Diab & Balaa, 2012)，実際教育現場においても日常的に活用されている。しかし生徒の中には，ルーブリックを活用しても，英文が十分に改善されないものがある。そこで，ルーブリック評価を介入させた場合，学習者がそのルーブリックに対してどのような思いを持っているのか，また，その思いは英文の変化と関連性があるのか，十分に解明されているとは言えない。そこで，その関係について探究した結果について発表したい。

第 4 室（K113）

14：50 ～ 15：20
オランダの英語科教育実習生を対象とした授業カンファレンスの分析

猫田　和明（山口大学）

オランダの教育実習生による英語の授業後に行われた指導教員との振り返り活動を録音して書き起こしたデータを Heron（2001）の介入の 6 分類を用いて分析した。指導教員の問いかけや支持的な介入が多く起こっている場合には実習生の主体的で深い省察が行われていた。発表ではいくつかの場面を取り上げて紹介する。

15：25 ～ 15：55
学習者によるコミュニケーション英語における授業実践の評価と教員の振り返り
―『学びあう』集団作りを目指して―

石井　達也（広島大学大学院生）

発表者は『学びあう』集団作りを目的に，高校 1 年生にグループで教科書の分析・作問・プリント作成・授業・定期試験作成を行う授業実践を 2 年間行った。本発表では，その授業実践の内容と事後アンケートをもとに，学習者が何を学んだかを教員が振り返ることで，『学びあう』集団作りに必要な要素について考察する。

16：00 ～ 16：30
チーム基盤型学習（Team-Based Learning）における役割付与が英語学の専門知識習得に与える影響―大学でのアクティブ・ラーニング実践―

関谷　弘毅（広島女学院大学）

本研究は，チーム基盤型学習（TBL）においてグループメンバーに役割を付与して大学の英語学の授業を実施し，専門知識習得に与える影響を，2017 年度の講義形式，2018 年度の役割付与のない TBL 形式の授業と比較検討した。その結果，TBL を取り入れた授業は講義形式よりも知識，理解の向上に，役割を付与すると表現の向上に好影響を与えることが示された。

16：35 ～ 17：05
反転授業の効果―学習習慣との関係―

井上　聡（環太平洋大学）

本研究では，初年次生英語科目で反転授業を導入し，準備学習，協同学習，学習成果の観点から効果測定を行った。従来型から反転型に切り替えた時点でデジタル教材の使用法への戸惑いが伺えたが，その差は徐々に解消された。また，時間管理や利便性といった点でデジタル教材が好まれる一方で，参考書や辞書等を使用した予習を求める声も根強く残った。

17：10 ～ 17：40
「英語を英語で」教える高等学校学習指導要領が英語教育現場に与えた影響

岩中　貴裕（山口学芸大学）

本研究の目的は，2013 年度より年次進行で実施されている現行高等学校学習指導要領が英語教育に与えた影響を明らかにすることである。大学生を調査参加者としてアンケート，半構造化面接を実施した。収集したデータを分析した結果，現行学習指導要領は高等学校の英語教育にほとんど影響を与えていないことが明らかになった。

第 5 室（K114）

14：50 ～ 15：20
英語教育の改善に関する一考察―ビジネスモデルの視点から―

宮迫　靖静（福岡教育大学）

本発表は，ビジネスモデルの視点から英語教育の改善について考察する。PDCA が英語教育に導入されたが，これは品質管理を目的とするカイゼンの一環としてはじまった。PDCA を振り返り，英語教育にまで導入された経緯と現状を考察する。また，PDCA が教育現場でうまく機能していない状況において，新たなモデル OODA と比較しながら英語教育の改善を考察する。

15：25 ～ 15：55
『学び合い』におけるコミュニケーション観の転換―近代的主体からオートポイエーシスへ―

柳瀬　陽介（京都大学国際高等教育院）

主体的で深い対話をもっともよく達成している学校教育実践の一つの『学び合い』では，教師は授業中の介入を極力控えている。この逆説的な状況を理解するには，コミュニケーション観の転換が必要であろう。本発表では，私たちの多くが前提としている近代的主体概念を批判的に検討し，オートポイエーシスによるコミュニケーション観を提示する。

16：00 ～ 16：30
BASIC English の再評価と英語指導への活用可能性

西川　憲一（岡山理科大学）

BASIC English は C. K. Ogden 氏が体系化した英語の制限言語である。発表から時間が経っているとはいえ，その根底理念は現在でも十分通用するものがあると考えている。そこで本発表では，BASIC English の特徴を再確認するとともに現在の英語指導への活用可能性について論じるものとする。

16：35 ～ 17：05
中高英語教科書で用いられる二重目的語構文の頻度分析―用法基盤モデルに基づいて―

升田　智紀（広島大学大学院生）

用法基盤モデル（Langacker, 2000）では，言語知識の構築は具体的な個々の言語表現の頻度効果によって動機付けられるとされている。本発表では，中高英語教科書に見られる二重目的語構文の動詞の頻度を分析することで，教科書から得るインプットが学習者の構文知識構築に与える影響について考察を行う。

17：10 ～ 17：40
典型的な構文に見られる語用論的定型表現と間接発話行為

能登原　祥之（同志社大学）

本研究は，英語の典型的な構文に見られる語用論的定型表現（e.g., Bardovi-Harlig, 2019）と間接発話行為との関係を明らかにし，構文・定型表現・間接発話行為の 3 者の関係をふまえた文法指導を模索する。本発表では，話し言葉汎用コーパス（Spoken BNC 2014）を通した中頻度構文 5 種（感情，知覚・認知，心理，コミュニケーション，主体移動）の調査結果と教育的示唆を報告する。